

たかざし 史話 40

高砂神社での相撲興行Ⅱ

前回書きましたように、高砂神社での相撲興行は18世紀に入り隆盛期を迎えています。この頃には市域では多くの力士が育っています。「播磨奇人伝」にも紹介された荒井出身の小野川秀五郎や、高砂の待乳山甚蔵などは、江戸や大坂の大相撲でも活躍しました。待乳山は久留米藩主のお抱え力士にもなりましたが、享和二年（一八〇二）には高砂に帰り、高砂神社の記録によれば、文化十一年（一八一四）正月に「亀川甚蔵」として境内での相撲を願い出ているほか、文政三年（一八二〇）九月には不幸なことがあった彼を支援するため、朋友・弟子が興行を計画しています。

屋伊七郎も「桜島」という名前です。旅客を泊める宿屋と相撲の密接な関係の理由としては、江戸時代には名所として栄えた高砂で人をひきつける一つの要素として相撲興行がなされたためではないかと思われまします。さらに何かもめごとが起こると、こうした力士が仲裁に入っていることがありまします。このように、高砂において相撲が持っていた意味は、なかなか深いものがありそうです。

（高砂市史編さん専門委員

中川すがね）

また待乳山は通称「志方屋宗兵衛」といって南本町で宿屋を営んでいました。南本町は他にも力士が多く住んでいました

が、「浪花講」という全国的旅館組合の高砂宿の釣



▲ 薬待 仙乳 寺山 に甚 蔵の 墓の 墓碑